

なく揺れ動き、時間に追われてしまいがちです。しかし、少し足を止めて世界を見ると、そこには僕くも無限の時間が存在していることに気づかれます。音の振動に身を委ねること、肘をついて宝石を眺めること、鶏の真相について考えること、そして熊が前後に動くこと。それらの作品一つ一つが私の心に語りかけるのです。

作品を眺めているうちに、自分が時空を操っているような、過去と未来と現在を自由に行き来しているような感覚になりました。そこに存在していたものは普遍的で絶対的であると同時に、流動的で瞬間的なものでした。

そして、青山さんの「スタンプ」刷る大壁画を作ろう——天使のいる場所——へ参加もこの展示をより深いものにしてくれた気がします。それは床一面の大きな布に参加者が好きな色で大きなスタンプを押し、その上に各々が描いた天使を刷っていくというワークショップでした。アートという交差点で初めて会う者同士が一つの物を作り上げると言う事。そこでは大人も子供も無く、無垢な天使のごとく自由に絵の中を飛び回ることができるのです。

この企画展は、胎内のような温かく緩やかな心の鼓動を感じさせてくれ、無我夢中で遊んでいた子供の頃の記憶を思い出させてくれました。ここで出会った「時間を自由に操れる天使」の心を大切にしていきたいと思っています。

タムラ サトル

TAMURA Satoru

2009年は、郡山市立美術館から始まり、市原市水と彫刻の丘(千葉)、鶴岡アトフォラム(山形)、栃木県立美術館(栃木)、ラザノーヌ(埼玉)と、毎週どこかで展示施設があったりワークショップが開催されるような忙しい夏でした。

そのなかでも、郡山市立美術館での「アートの交差点」の展示ワークショップは、いままでの私のキャリアのなかで最大規模のものでしたので、より強烈に記憶されています。特に、12年前の作品「回転するワニ」を出展できたことは、感慨深いものでした。カタログでのスピンドルコダイルの制作年は1997年ですが、実質的には大学3年(1994年)の「電気を使った芸術装置」という課題で制作した作品なのです。

全体的な展示に関しては、いくつか課題が見つかりました。私の作品は大きく動くものが多く、それゆえ展示する方法場所が自ずから決まってしまうのですが、だからこそ位置の微調節やライティング、作品同士のコンビネーションなどを、再考する時間をより多くとるべきであったと反省しています。また、もともと、いわゆるホワイトキューブよりも、なにかしら特異な場所での展示(霊廟、ホワイエなど)が多く、その空間にある邪魔なもの(梁、柱、窓)を起点にして作品をインストールする癖があるのです。そういう意味で、美術館展示室の空間は、私にとって若干やかいかいであることにも気付きました。とはいっても、倉庫がほぼ空になるくらいの4トントラック3台分の作品がこうして一堂に会した展示は、実に壮観でした。富岡さんをはじめ郡山市立美術館の皆様にお礼申し上げます。

2009年の夏は旅の一座のように各地を巡りましたが、来年の今頃は何をしていますでしょうか。いろいろな意味で、ぎりぎりのところで作家活動をしているので、いつも自問自答しています。作家やっているか。いや、やっていると想っています。



野口 久美子

NOGUUCHI Kumiko

今回、初めての企画展への出品、また新作も含め2作品とコラボレーション作品の展示をさせて頂きました。

今まで、フェスティバルなどの展示が多く、美術館での展示が初めてだったため、いろいろと戸惑う事が多く、いろんな方にご協力頂きながら、作品を展示することができました。

・3年ぶりの新作(インスタレーション)発表

私の作品は、場所や機材などの設備が必要なので簡単に展示することが難しく、またインスタレーション作品の実績も少ないにも関わらず、新作の依頼を頂き



とても嬉しく制作に入りました。

・コラボレーション作品

初のコラボレーション作品となった「氷の計測」、2m近くある氷の固まりが溶ける様子を観測するという試み、この企画をキュレーターの方々にお話したとき、正直採用されないうと思っていました。しかし、「声目に「おもしろそう」という言葉を頂き、実現することとなりました。

このように初めての試みを積極的に受け入れて頂いたことは私にとって、自信や今後の制作へのモチベーションを維持させる大きなものとなりました。また、この企画展では、手法の違う作家が集まった展示だったため、鑑賞者に〇〇アートというような先入観を植え付ける事無く、「アート」という大きな枠を見る事ができたのではないかと思います。

今後様々な作品や作家が交差するような展示会が増えて行く事を期待しつつ、私自信も作品制作の足を止めず続けて行くことを強く思っています。